

埼玉県地域共同リポジトリ形成事業に参加して ー連携機関 文教大学の立場からー

文教大学越谷図書館 鈴木正紀



- 機関リポジトリ構築のための要件には以下のようなものがあるだろう。
- (1)当該機関に、自機関で生産した学術成果物を電子的に保存し発信するという意思があるかどうか。
 - (2)発信するためのノウハウが存在するか。
 - (3)リポジトリ構築のための費用を調達できるか。

なによりも不可欠なのは要件(1)であろう。量の多寡はあれ、新設でもない限り大学には「紀要」というコンテンツはある。まずはそうしたものを学外に発信していこうという理解が機関の中に形成されうるか、またそうした方向へのイニシアチブを発揮する部署が学内にあるかどうか。そこがリポジトリ構築への第一歩となるであろう。

それを実現するには(2)(3)の要件が必要となるわけだが、これは「共同リポジトリ」というモデルにより、敷居を相当程度低くすることができる。

本学は2008年度より、埼玉県地域共同リポジトリ構築事業に連携機関として参加している。上記要件を本学の事情に照らし合わせてみると、(1)については十分な意思があった、しかし(2)(3)については、その調達の見込みはほとんど立たない、という状況であった。

そうした中で、2008年1月初旬に埼玉大学より地域共同リポジトリ構想の話聞き、国立情報学研究所(NII)の平成20-21年度CSI委託事業への連携機関としての参加の打診をいただいた。タイミングとしては絶妙であった。

当時は理事長(前理事長)の方針として、「大学からの情報発信」ということが大学の各部署に対して強く要請されていた。理事長が「情報発信」といったときどこまでをイメージしていたかはわからないが、こうした方針がある以上、リポジトリ事業を学内で説明し、「大学の事業」として位置づけることにそれほどの時間も労力も必要としなかった。埼玉大学から話をいただき、学内調整をした結果、2か月足らずで大学の事業として承認されたと記憶している。この際、どの機関でも留意することであろうが、リポジトリ事業を「図書館の事業」ではなく「大学の事業」として位置づけることはその後の展開を左右するほどの分岐点になるのではないかと考える。本学では、上記のような背景があったため、この点は何の障害もなかった。

登録するコンテンツについて、本学ではすでに学部紀要の電子的公開は10年ほどの蓄積があった。一部の大学ではリポジトリ事業を学内で諮ると、電子的公開について拒絶反応が出るという話を聞く。幸いなことに、学術的著作物の生産者である教員についても、論文の電子的公開についての拒絶はほとんどなかったといっていよい(本学では、著作権が著者にあることになっている。したがって、公開の許諾は、個々の論

SALA 通信 No.17 (2009.5.21 発行)

文について執筆者にとるという方法を取っている)。当面は 500 本前後あるこうした
ボーンデジタルのものを SUCRA に移行していくことを基本として作業を進めている。

学内はこうした状況であった。あとはノウハウとハードウェア、ソフトウェアであるが、これについては埼玉大学の手厚いバックアップ、サポートにより、さしたる問題もなくデータ登録にこぎつけることができた。もし、学内調整をする段階で予算措置が必要ということがあれば、展開はもっと遅れていただろうと思われる。なによりも、すでにあったコンテンツを移行することで、大学からの情報発信プラットフォームができる、そこに専心すればよいという環境は大変恵まれたものであったといえよう。

今後の課題としては、なによりも学内の体制整備である。コンテンツ収集、著作権処理、作業体制の確立、といったことについては、まだ十分な検討ができていないわけではない。本文の冒頭、リポジトリ構築のための要件を 3 つあげたが、実はもうひとつ、(4)として、持続的な成長を可能にするための体制が整備できるか、といったことをあげておかなくてはならないだろう。現在は越谷、湘南両図書館の担当者が、他の業務の片手間にやっているに等しく、当初の計画よりもコンテンツ登録数は少ないという状態である。

また、教員からは、SUCRA では「文教大学の顔」が見えない、といった指摘も受けている。この点は共同リポジトリの先駆的事例である広島県の HARP と比較すればあきらかである。これについては、SUCRA 参加機関がそれぞれ、カバーページの役割をするホームページを作るというようなことが当初から計画されている。これをひとつのステップとして、文教大学の顔が見える共同リポジトリにしていきたいと考えている。

まだまだ課題は多いものの、何よりもすでに連携機関として動いている、コンテンツが SUCRA で公開されているということの意味は大きい。

すでにある事実をテコにして、今後の展開を図っていききたいと思う。